

高梨氏館跡発掘調査
概 報 III

1992・3

中野市教育委員会

例 言

- 1、 本報告書は、長野県中野市小館にある、長野県指定史跡高梨氏館跡の平成3年度発掘調査についての調査概報であります。
- 2、 発掘調査にあたっては、平成3年度(1991) 県費補助金の交付をうけて、中野市教育委員会がおこないました。
- 3、 調査主体は中野市教育委員会で、調査組織は次のとおりです。

顧 問	長野県史協議委員・山ノ内町文化財保護審議会委員長	金井喜久一郎
＼	長野県史編纂委員(中世史担当)・法政大学史学会評議員	湯本 軍一
調査団長	中野市文化財保護審議会会長・日本考古学協会員	金井 汲次
調査主任	日本考古学協会員	檀原 長則
調 査 員	日本考古学協会員	田川 幸生
＼	＼	関 孝一
＼	＼	郷道 哲章
＼	＼	土屋 積
＼	長野県考古学会員	池田 実男
＼	＼	酒井 健次
＼	奈良大学	小野 紀男
事務局	中野市教育委員会教育長	嶋田 春三
＼	＼ 教育次長	佐藤 嘉市
＼	＼ 社会教育課長	小野沢 捷
＼	＼ 歴史民俗資料館管理係長	池田 剛
＼	＼ 学芸員	徳竹 雅之

- 4、 現地調査は平成3年7月23日から9月30日まで館内部(土塁内)の調査を行い、12月9日から1月26日まで、東入り口までの取り付け道路内の調査を行いました。
- 5、 調査の指導は、奈良国立文化財研究所建造物研究室長・細見啓三、同所平城宮跡発掘調査部主任研究官・本中真、また東京大学文学部(国文学科主任)教授・石井蓮、文化庁文化財保護部主任調査官 宮本長二郎、県教委文化課・児玉卓氏ら多くの研究者・参観者から有益なご指導・助言をいただき深く感謝します。
- 6、 本報告書は、金井喜久一郎・湯本軍一・金井汲次の指導により、檀原長則・徳竹雅之が執筆・編集しました。なお刊行にあたっては湯本軍一調査団顧問に監修していただきまし

た。

- 7、 本報告書作成のための製図やトレースの作業は池田実男・小野規男・湯本栄一・檀原みち江・山崎のり子・池田きよ子・樋口義政・宮本公次が行いました。
- 8、 写真撮影は檀原長則が行いました。
- 9、 調査によって出土した遺物の整理や測量図などの分析・検討などの最終成果については、発掘調査の終了をまって、正式に報告書として刊行する予定です。
- 10、 なお執筆にあたっては県史・信濃史料やその他の多くの文献を参照しましたが、報告書の性格上、注記は省略させていただきました。また指導者名も省略させていただいたところもあります。

目 次

例言

I 平成3年度調査の概要	1	4 貯蔵堅穴・土坑・水溜めの調査	14
II 発掘調査地点の概要	1	5 水路・溝の調査	29
1 庭園の調査	1	6 東入り口取付け道路用地内の調査	32
2 埋没した石積み調査	8		
3 建物礎石の調査	10		

挿 図 目 次

1 庭園実測図	3	15 A J12の水溜め実測図	26
2 池の配石見取り図	5	16 B J10の水溜め実測図	27
3 1991年の調査地点位置図	7	17 BN6の土坑	28
4 埋没していた石積み実測図	9	18 BK1の水路	30
5 館内東側遺構図	11	19 同水路南側の中世土師器	30
6 石積み貯蔵堅穴(水溜めか)実測図	14	20 BR5の水路	30
7 五輪塔の地輪実測図	16	21 東入り口道路用地内グリット設定図	33
8 " の水輪実測図	16	22 同 外の調査全体図	34
9 B J3の土坑実測図	19	23 中世土師器実測図(1)	37
10 同 南北中央断面実測図	22	24 " (2)	38
11 同 銅金具類実測図	23	25 鉄鎌・釘など実測図	40
12 同 染付竜文皿実測図	23	26 陶磁器実測図	41
13 同 鉄釘実測図	24	27 古銭拓影図	42
14 同 鉄釘・掛金具実測図	24		

表 目 次

1 表1 B J3土坑出土古銭	25	3 表3 館内出土の古銭	42
2 表2 館内出土の土器・陶磁器	40		

写真目次

1	池の西北から見た庭園全景	1	28	同	出土の銅金具類	22
2	高梨政道歌碑下部の汀線の配石	2	29	同	出土の染め付け	22
3	滝口付近の石組み	2	30	同	出土の鉄軸壺(?)破片	22
4	西側から見た埋没石積みの北側部分	8	31	同	出土の鉄釘・掛金具	23
5	北側から見た埋没石積みの全景	8	32	同	出土鉄釘	25
6	東から見た中央礎石群	10	33	同	出土の焼けた古銭	25
7	貯蔵坑周辺の礎石	10	34	AH12の水溜め		26
8	西から見た庭園北方の礎石・緑石・雨落ち	13	35	B J 10の水溜め		27
9	南から見たB区北の礎石	13	36	BN6の土坑		28
10	西から見たB区中央の礎石	13	37	同	出土の鹿角・中世土師器	28
11	貯蔵堅穴(BL5) 上層から出土の五輪塔の地輪	15	38	西から見たBK1の水路		29
12	東側から見た同堅穴	15	39	同	南側出土の中世土師器	29
13	南側から見た同堅穴中央断面	15	40	BR5の水路		29
14	五輪塔の地輪	16	41	東面土塁内側の石積みとBQ2の石列		31
15	〃	16	42	B区中央水路出土の永楽通宝		31
16	北側から見た2基の貯蔵堅穴(水溜めか)	17	43	粘土で練り積みされた石積み		31
17	北側から見たBK5の貯蔵堅穴	17	44	東入り口外側の道・溝		32
18	同 西側から見た断面	18	45	同	溝底・溝断面	33
19	同 底にあった青石・かわらけ	19	46	同	溝の全景(1)	35
20	東側から見たB J 3の土坑	19	47	同	(2)	35
21	同 上層出土の鉄軸壺破片	20	48	同	出土の内耳土器	35
22	同 中層出土の銅金具・炭	20	49	同	溝出土の常滑甕破片	35
23	同 中層出土の壁・鉄釘など	20	50	東面掘断面		36
24	同 中層出土の壁の表面・炭	20	51	王日神社の西トレンチ		36
25	同 中層出土の木舞のあと	21	52	同	中央出土の白かわらけ	36
26	同 底出土の銅金具	21	53	東面掘の東側道路用地断面		36
27	同 西側から見た中央ベルトの断面	22	54	DE14出土の中世土師器		39
			55	館内出土の中世土師器		39
			56	鉄鏃・鉄釘・鉄釘の塊		39
			57	測量風景		39

I 平成3年度調査の概要

平成3年度は館内部について7月23日から9月30日まで調査を行った。庭園部の調査は奈良国立文化財研究所・平城宮跡発掘調査部の本中主任調査官を指導者に迎え、前年度までの調査の実践をふまえて、池の形式、庭石の配置、土層、建物との関係などの調査を行った。しかし戦国時代の地方武将の館の庭園を復元するには、さらに綿密な調査が必要であり、次年度も調査を継続することになった。

建物址を主体とする調査は、奈良国立文化財研究所の細見建造物研究室長の指導を得て、前年度までの調査結果をもとに、礎石、溝などの精査を行った。しかし明確な建物址プランの確認までには至らず、次年度も調査を継続することになった。

なお、館が築かれた歴史的経過を確認するため、遺構面のみられない場所をトレンチ方式により掘り下げたところ、現調査面より下層に石積みなどの遺構が発見された。

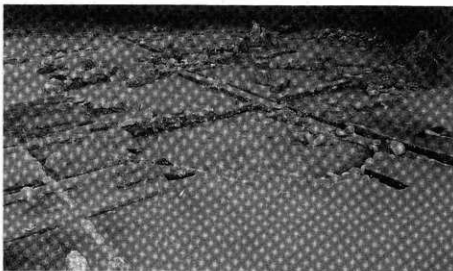
さらに12月9日から1月26日まで館の東方の王日神社から、館の東入り口までの取付け道路用地内（ブドウ園）の調査を行った。これにより、外部にも中世の遺構が存在することが判明した。

II 発掘調査地点の概要

1 庭園の調査

これまでの調査で池の形式はほぼ判明していたが、中央部に高梨政道歌碑があり、これが支障となり調査が遅れていた。

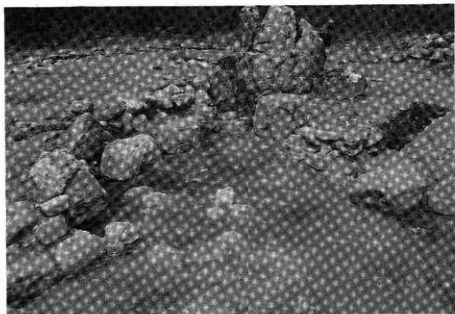
1.→ 池の西北
からみた庭
園全景



今回の調査に先だち歌碑の移転を行い、ここから発掘をはじめ、試掘坑を縦横に入れて、土層・池・配石の関係を調査した。



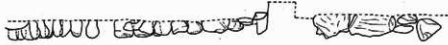
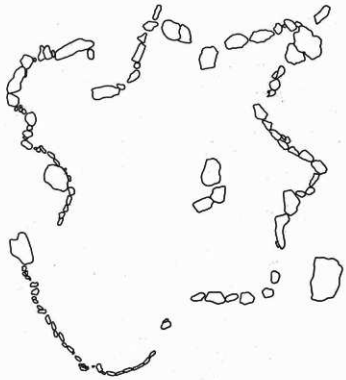
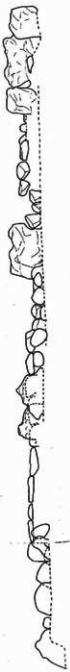
2. ↑高梨政道歌碑下部の汀線の配石（池の東北部分）



3. ↑滝口付近の石組み（池の東南部分）



1 區 壩 體 示 意 圖



2 圖 池の配石見取り図

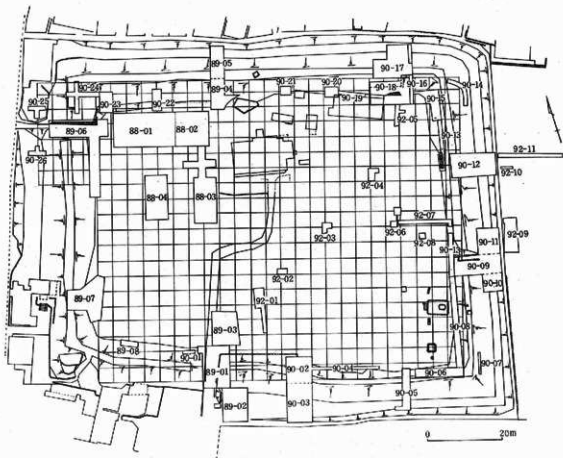


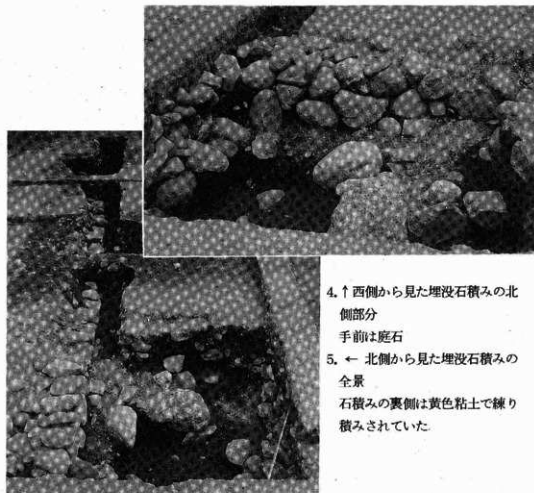
図3 1991年の調査地点位置図

2 埋没した石積みの調査

庭園の西方の地点を掘り下げ、遺構面を確認したところ、南北方向に石積みが存在することが確認されたが、現調査面より古い時代のものと考えられるため、調査は小範囲に止めた。

現地表下1.3mに安山岩の山石（庭石）を検出し、石の配列、礎石と思われる遺構も見つかった。さらに池と推測される場所もあり、泥土の堆積が見られた。

石積みは長さ約10m、高さ最大70cm位で、上部は破壊された部分が多かった。石積みの埋没状態は、大小の石と土砂、炭化物、かわらけなどの遺物がまじっていて一度に埋められた状態を示している。かわらけは、この館としては古い形式を示すがこれは、ここの遺構面と南側の古い築地塀の基礎との差がほぼ同じことと関係していると考えられる。



4. ↑ 西側から見た埋没石積みの北側部分
手前は庭石
5. ← 北側から見た埋没石積みの全景
石積みの裏側は黄色粘土で練り積みされていた

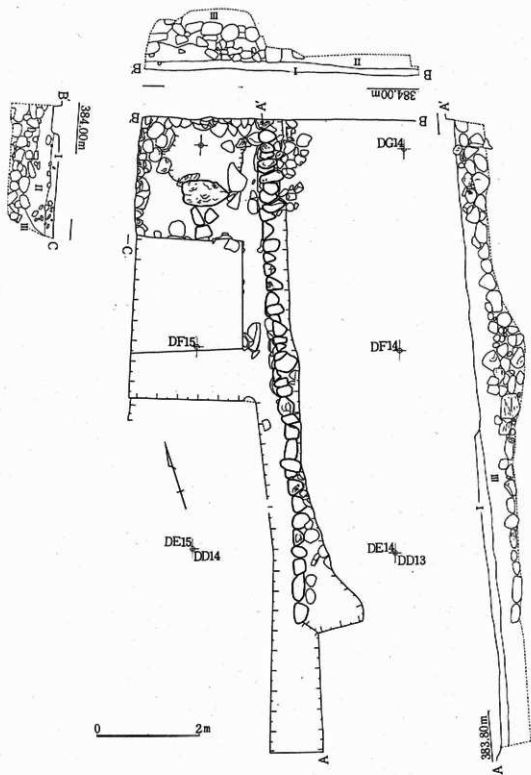


図4 埋没していた石積み実測図

3 建物礎石の調査

礎石のある建物は、現在通用の南入り口位置を基点とする南北線の東側に幾棟かあったことが、昨年までの調査による礎石の出土状態から判明している。しかし桑・りんご・アスパラガスなどが作られてきたため、多くの礎石が除去されており、建物址プランを確認するまでには至っていない。

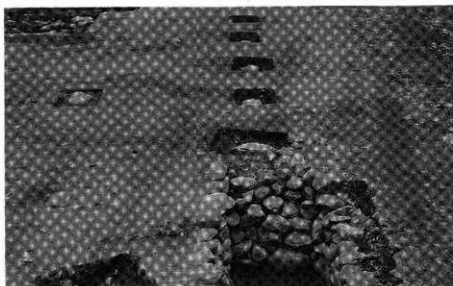
今回の調査は、この東側の部分について、今まで掘り下げが足りなかった部分の掘り下げを含め、抜き石跡の確認に注意をしながら精査を行った。

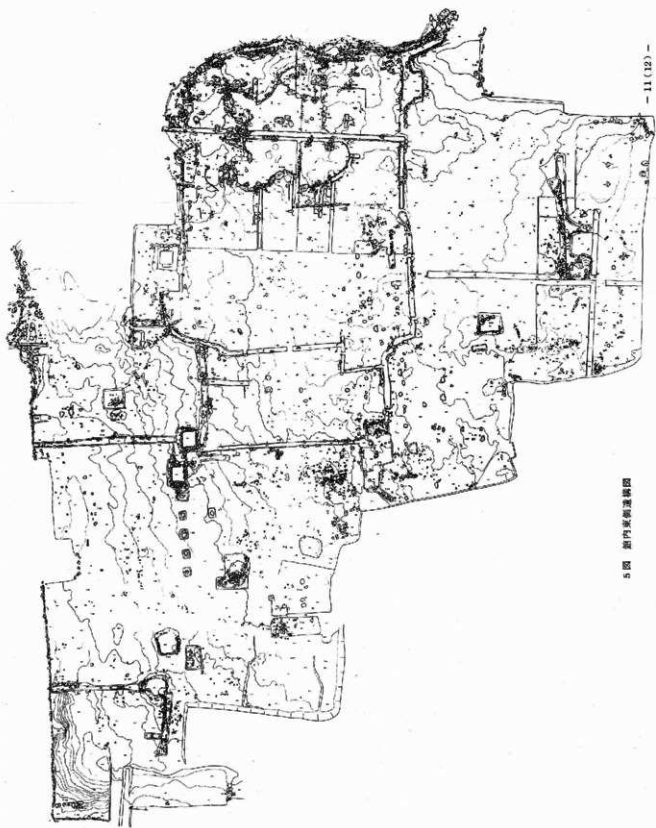
その結果、新たな礎石が出土し、若干の抜き石跡の発見もあったが、建物址プランの確認はできなかった。調査は4年度も行う計画である。



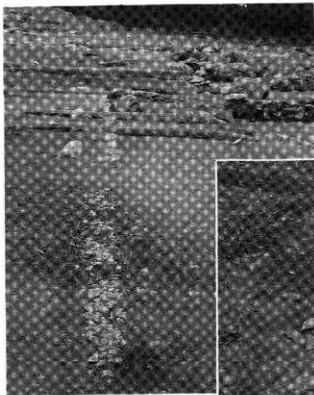
6. ↑ 東から見た中央礎石群

7. → 貯蔵
坑周辺の
礎石（調
査未了）





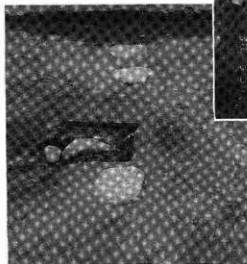
5 圖 新內東部遺跡圖



8 ← 西から見た庭園北方の礎石・
縁石・雨落ち
庭に面した建物の礎石は、こ
この北側に連なる礎石が耕作
のため抜かれているので不明
である。



9 ↓ 南から見たB区北の礎石



10 ↑ 西から見たB区中央の礎石
礎石まわりの石は当初のもの
とは考えられない。礎石の上
方位置にみえる凹みは、石の
抜き穴。

4 貯蔵堅穴・土坑・水溜めの調査

(1) 貯蔵堅穴 (BL5) 平面掘削作業中に3個の石列が検出されたのを機に発見されたもので後に検出された北方の礎石列と方向が一致する。(写真9)

いまのところ、これに連絡する水路・溝などが発見されないので貯蔵堅穴として報告する。上幅で縦(南北)210cm、横120cm、深さ100cmの大きさで、側壁は河原石で石積みされているが北側壁は段状につままれていてノリ面が大きい。

このなかに埋没していたのは、黒色の砂・土のほか、墨書銘のある五輪塔の地輪(図7)の破片と思われるものや水輪一個などであった。その下層には、埋没の過程を示す茶褐色砂土、黄褐色色砂土などが斑状に堆積していた。

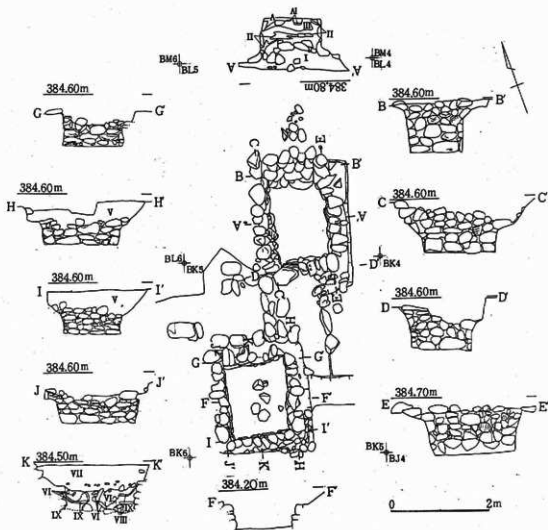
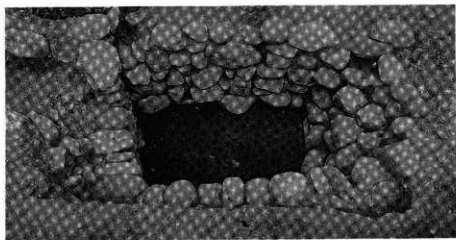
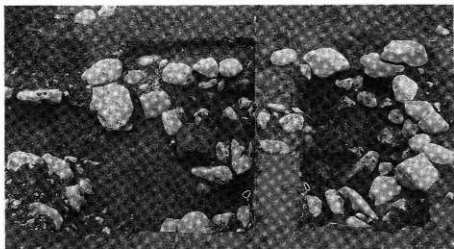


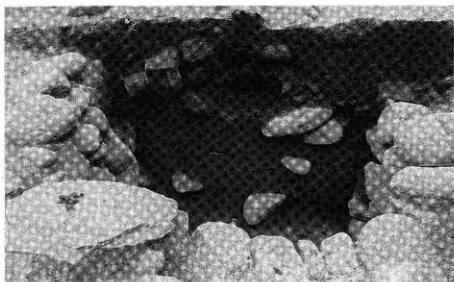
図6 石積み貯蔵堅穴(水溜めか)実測図

11 → 貯蔵
竪穴 (BL
5)
上層から出
土の五輪塔
の地輪



12 ← 東側
から見た同
竪穴

13 → 南側
から見た同
竪穴中央断
面



ここから出土した地輪には、四面の中央に墨書で仏と書かれ、その一面には右上に妙忍□とあり、中央に仏、左下に供養年月日が記されていたと思われるが、墨痕のみ僅かしか残っていない。

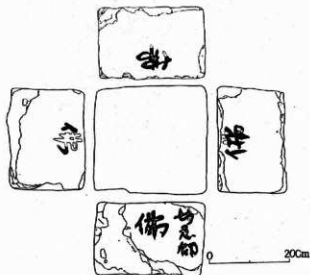


図7 五輪塔の地輪実測図

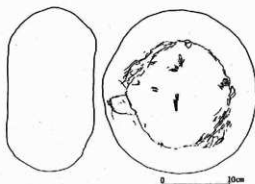
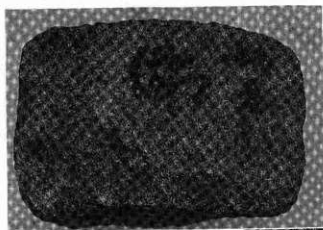
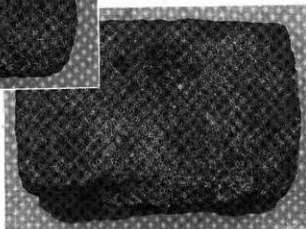


図8 同 水輪実測図



14 ← 五輪塔の地輪
軟質な安山岩を粗雑に加工している

15 → 同上



16 → 北側から見た2基の貯蔵堅穴
(水溜めか)

(2) 貯蔵穴 (水溜め) (BL5)

前の貯蔵穴から南へ約1.5mの位置に同じような遺構があった。規模は上幅が縦(南北)150cm、横120cm、深さ90cmで、前のものと方向はおなじだが、南北の端が食い違いを見せていた。

また遺構は前のものに上部が壊されており、埋没していた。

使われている石も前のものより小ぶりで規模も小さかった。

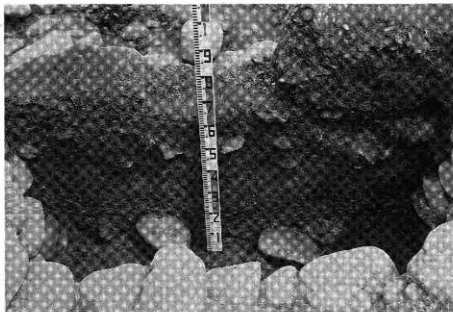
この埋没状況もほぼ前のものと同じで、底に群馬県に産する三波石に似た青い石が2個と河原石2個、中世土師器(かわらけ)1個があった。またこの貯蔵穴は、東からの水路に当たり、水溜めの機能を果たしていたとも考えられる。



17 → 北側
から見た
BK5の
貯蔵堅穴



18 → 同
西側から
見た断面
人為的に
埋められ
た下は鉄
さび色の
土が斑状
に堆積し
ている。



19 ← 同底
にあった
青石・か
わらけ

(3) 焼けた土坑 (B J3)

B J3の地点を中心に焼土が広がっていた。この付近を掘り下げると1.8m(6尺)四方、深さ80cm程の落ち込みが現れた。ここには焼土が埋まり、壁・古銭・切子頭の銅金具・鹿角・玉・染付・鉄釉壺(?)・かわらけ・景石など多数の遺物が出土した。このうち、切子頭の銅金具(座金物・鑽)は、一般には御正体(懸仏)の吊輪や総角結びとした組緒を下げて、兜を装飾するためにつける金具(笠印付鑽)、大鯨や大袖付の胸丸にも同じような

金具がつかわれている。また鑲台としては、奈良・平安時代から手箱や唐櫃にも用いられているが、この銅金具の用途は特定できない。

そして鎧兜の場合は、この鑲台の頭が、切子頭から丸頭になる過渡期は、鎌倉後期から南北朝時代といわれている。

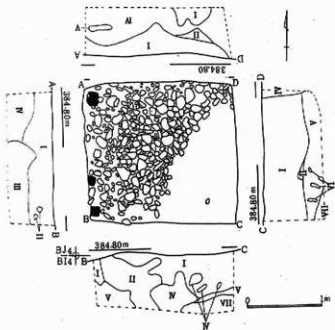
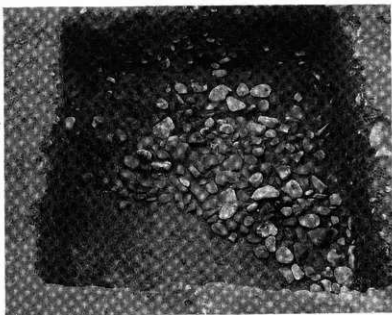
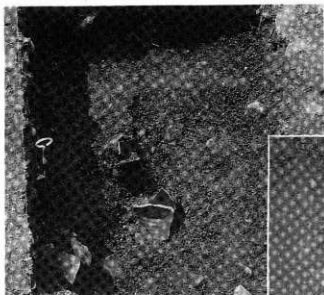


図9↑ B J 3の土坑実測図

20 → 東から見たB J
3の土坑
周囲の壁は赤く焼
け底に礫がみられ、
銅金具などが落ち
込んでいた。





21 ← 同 上層出土の鉄胎壺破片

22 ↓ 同 中層出土の銅金具・炭



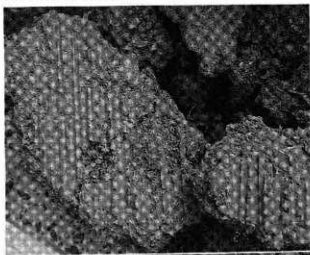
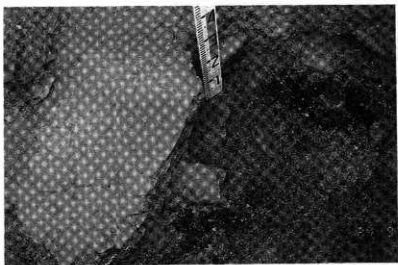
23 ↓ 同 中層出土の壁・鉄釘など

このように多量に遺物が埋まっているのは、火災後に一括埋められた状態を示している。



- 24 → 同 中層出土
の壁の表面・炭
25↓ 同 中層出土
の木舞のあと

中世の壁がこのよ
うに残っているのは、
珍しいといわれる。
普通は建物と一緒に
消滅してしまうから
である。壁の厚さは
芯まで8cmであるが4

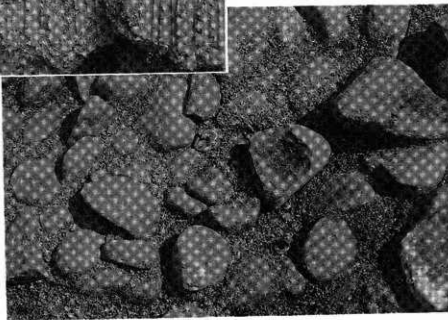


cmのところまで一回塗り、次にまた4cmほ
ど塗って仕上げています。

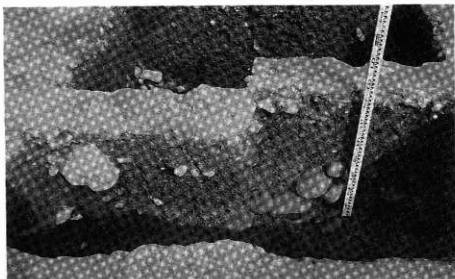
壁の芯・木舞(コマイ)は、残ってい
る限りでは横の芯はみられない。

このように壁の厚さは合計すれば、
16cmになって、今でいう大壁(土蔵)
と同じである。

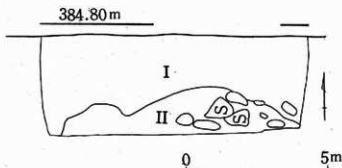
- 26 → 同
底出土の
銅金具



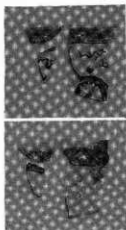
27 → 同
西側から
見た中央
ベルトの
断面



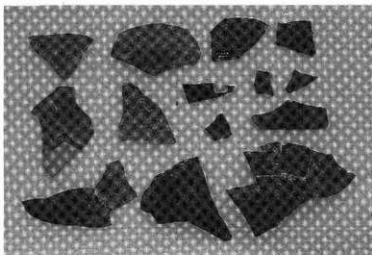
28 ↓ 同
出土の銅
金具類



29 ↓ 同 出土の染付
上、見込みは竜文、口
縁内外は、四方禰文、
(明の染付)



30 ↓ 同出土の鉄胎壺(?)破片 図10 同南北中央断面実測図



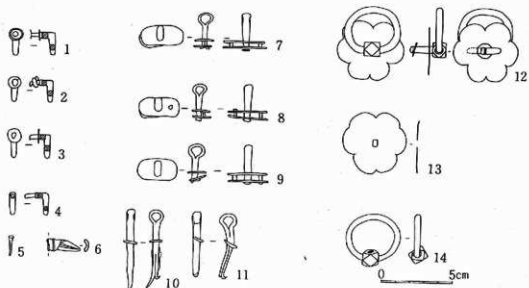
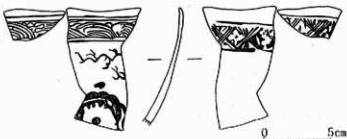


図11 ↑ 同 銅金具類実測図

図12 → 同 染付け 竜文皿

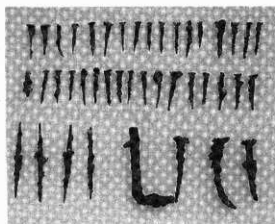
実測図



この土坑から出土した釘類は、長さ14cmの銅釘(図11) 1本のほか、鉄製品の合釘が4本あり、断面は四角で長さ10cmほどである。

そのほかの多数の釘は長さ10cm位から3.5cmまでであるが、5~6cmのものが多数を占めている。

この釘の作りかたを見ると、頭の部分を薄く延ばして切断している。これを叩いた時、頭の部分が半円形に折り曲がったと考えられる。なかには長さ4cm位で折り曲げられた釘もあり、これを使った木



31 ↑ 同 出土の鉄釘・掛金具

造（建造）物は、小さそうである。

この土坑から出た鉄釘は大小合わせて、完形品73本、途中で折れたもの72本、短く折れたもの92本ある。

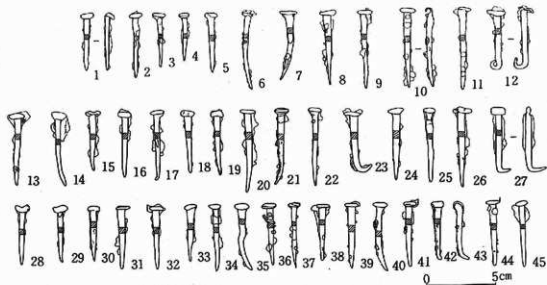
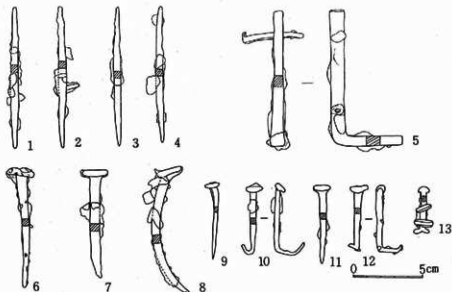


図13 同 鉄釘実測図

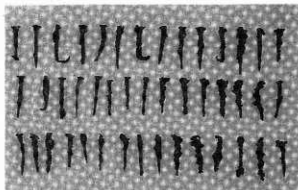
図14 → 同 鉄合
釘・掛金具実測
図

中には頭の
丸い止金具も
ある。(13)

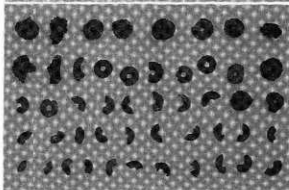


この土坑には中国からの渡来銭が、他の遺物と混在して埋まっていた。これは火熱のため文字不鮮明のものが多く、溶けて接着したものが、10個体を数える。大部分は破片である。

これらの古銭には日本の銭(寛永通宝)は含まれておらず、中国銭の下限は永楽通宝(1403)である。



32 → 同出土の鉄釘



33 → 同出土の焼けた古銭

表 1 B J 3 土坑出土古銭表

番号	銭種	枚数 (股けて合体)	字体	備考	番号	銭種	枚数 (股けて合体)	字体	備考
1	不明	6	不明		28	不明	4	不明	#
2	#	7	#		29	□□元宝	1	不明	#
3	皇宋通宝	5	隸	他不明	30	元□□宝	1	真隸	#
4	4	4	#		31	皇□□宝	1	隸	1/2
5	太平通宝	2	真	他不明	32	不明	2	不明	#
6	永楽通宝	2	真隸		33	元□□宝	1	不明	1/3
7	不明	3	不明		34	□□□宝	1	行	1/2
8	#	10	#		35	□□通□	1	真	1/4
9	#	4	#		36	□篆□□	1	真	#
10	#	3	#		37	□符□□	1	行	#
11	政和通宝	2	真	他不明	38	□和□□	1	真	#
12	不明	2	不明	1/2	39	□篆□□	1	行	#
13	□□元宝	1	真		40	□順□宝	1	隸	2/5
14	元豊通宝	1	真隸		41	□□□宝	1	行隸	1/4
15	不明	9	不明	推定	42	元□□□	1	行	2/5
16	永□□宝	1	真	1/2	43	政□□□	1	行	#
17	太□□□	1	不明	#	44	□元□□	1	不明	#
18	不明	2	不明	#	45	不明	2	不明	1/4
19	□□元宝	1	隸	#	46	□□□宝	1	隸	2/5
20	□□□宝	1	隸	3/5	47	□□□宝	1	真	1/4
21	元豊通宝	1	行		48	□隸□□	1	真	#
22	政□□宝	1	真	2/1	49	□篆□□	1	真	1/2
23	□□元宝	1	行	#	50	□篆□□	1	真	1/4
24	□元□□	2	真	#	51	元□□□	1	行	#
25	永□□宝	1	真	#	52	□通□□	1	真	#
26	不明	2	不明	#	53	□□□宝	1	真	#
27	□元通□	1	真	#	54	□宋□□	1	真	#
					55	不明	56	不明	1/4以下

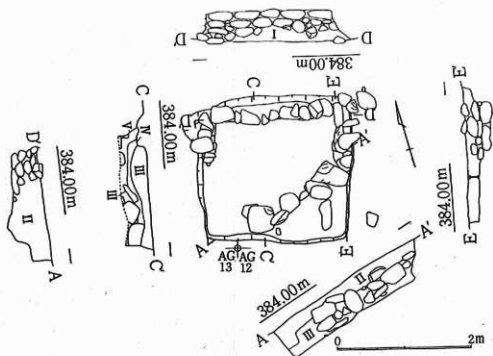


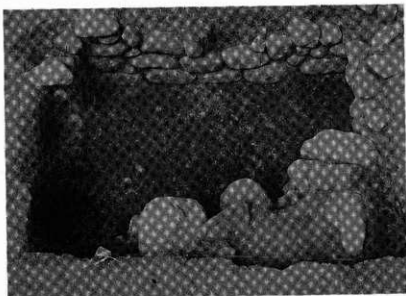
図15 AH12の水溜め実測図

34 → AH12水溜め

(4) AH12の水溜め

ここも平面を掘り下げたところ、石が2個ならび、中に黒色土が埋まっていたので、遺構の存在が予知された。

北側とそれに続く両袖が残っていたが、その他は壊れ、西側は、特に掘り返されていた。



北側の内法180cm、南北120cmが原形と推定され、深さは50cmである。これも水路との関係が明確でないが、館内の他の例から水溜めと考えた。

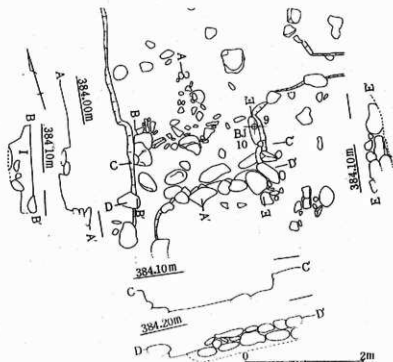


図16 B J 10の水溜め実測図

(5) B J 10の水溜め

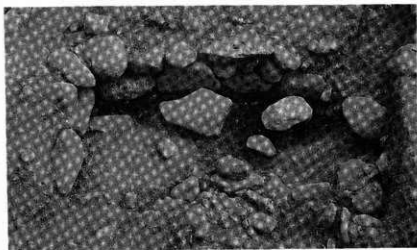
この水溜めは建物跡の中心部にあり、水路と連絡していたと思われるが、水路は前後が攪乱しており明確でなかった。

水溜めの石積みは南側と東側に一部が残っていた。

西と北側は石積

みが壊されていた。内法で南側150cm、東側80cmが残って、深さは40cmである。水溜めの原形は180cm四方(6尺角)位であったと思われる。

石積みの残っていた部分には砂が堆積して水溜めが埋まっていた。



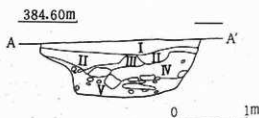


図17 BN6の土坑

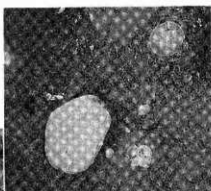
(6) BN6の土坑

こども平面掘り下げを行ったところ焼土(壁土の焼けたもの)が落ち込んでいた。

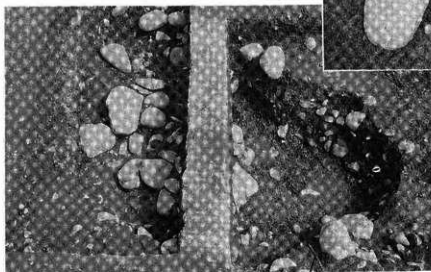
ここを掘り下げると直径(南北260cm、短径200cm、深さ80cm)の土坑であった。

北半分にはかなり大きな石が埋まり、南側の底近くには鹿角(写真37の石の上)と中世土師器が2つあった。一つは白かわらけ(白土器)である。(同石の右)

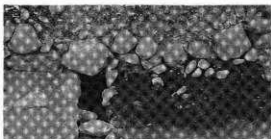
2個の土坑には遺物と一緒に腐植土が埋まっており、日常生活のあとを示している。



36 ← 西から見たBN6土坑



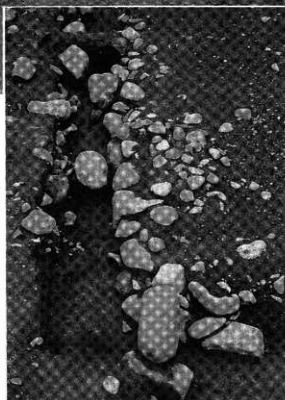
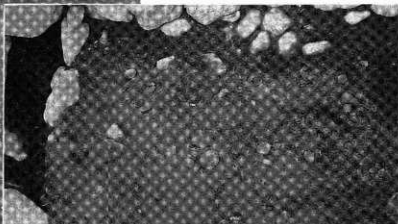
37↑ BN6出土の鹿角・中世土師器



38 ← 西から見たBK1の水路

39 ↓ 同南側出土の中世土師器

40 ↓ BR5の水路



5 水路・溝の調査

(1) BK1の水路

これは今年確認された水路で、東面の土塁に近づくほどよく保存されていたが、それは耕作の跡がはいらなかったためと思われる。この西方にBK5の貯蔵堅穴がある。

この水路は土塁の中に通じていると思われるが、その先は確認されていない。

この水路の入り口（土塁内側）南

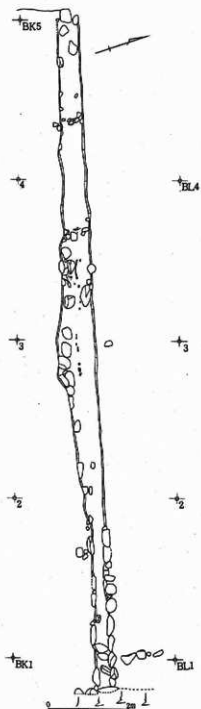


図18 BK1の水路



図19 BK1水路南側の中世土師器

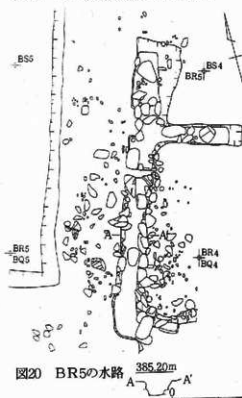


図20 BR5の水路 $385.20m$
A A' 2m

側の140cm×80cmの範囲に中世土師器が集中して出土した。水にかかわる祭祀の後、廃棄されたかと思われるが明らかでない。

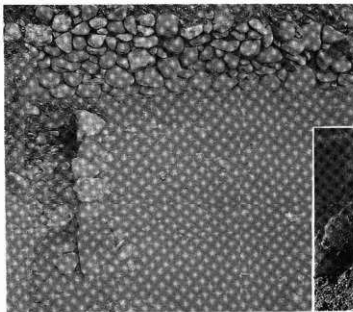
前年の調査で、この水路南の東入り口からも多量の中世土師器が発見されている。

(2) BR6の水路

この水路はB区の北方に位置する水溜め、(概報1参照)に連絡するもので、その先方の北面の土塁には、水路の施設が発見されていない。

またこの水路と連絡している水溜めの東側にも石積みと直角に石が並んでいた。(写真3)

(3) この地点の付近は次年度に調査を予定している。

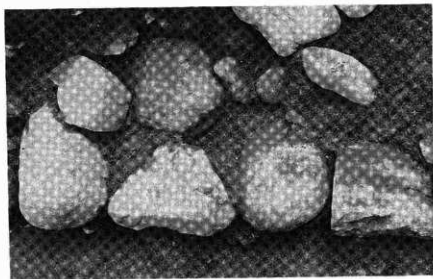


41 ← 東面土塁内側の石積み
とBQ2の石列

42 ↓ B区中央水路出土の永
楽通宝 南から



43 → 粘土で
練り積みさ
れた石積み
(埋没した
石積み)
西から



6 東入り口取付け道路用地内の調査

東入り口からは、土橋を渡って詰城（鴨ヶ嶺城）に通ずる道があったと考えられる。このためこの調査は外郭の遺構の有無などが焦点になった。

調査は東入り口から北へ44m、そこからさらに東へ32mにわたって行った。

(1) 東入り口外側の調査

ここは用地幅6mについて全面調査した。館からの通路は4mで東へ延びていた。道路面は耕作により一部掘り返され小石が埋まっていた。面上に黄色粘土（館内に見られる粘土と同じもの）が見られるところもあり、館内の黄色粘土はこの方面から搬入されたとみられる。

この道の南側（B8・C8）には中世土師器が集中し、C8の壁（用地境）には内耳土器（写真47）もあった。

したがってこの方面にも中世の遺構が存在する可能性が大きくなった。また、道の北側には上幅2m、深さ70cmの溝が用地幅分（6m）確認され、堀から東へ傾斜していた。この溝がなんのためのものか判然としない。

この溝の中からは常滑の甕、蓮弁文の青磁碗破片、中世土師器、鉄鍔などが出土した。これらの内耳土器、陶磁、中世土師器は高梨氏居館出土品のなかでは古式に属するとみられる。



44 → 東入り口
外側の道・溝

45 → 同溝底・溝断面

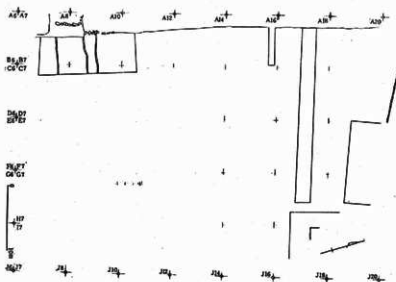


図21 東入り口道路用地内グリッド設定図

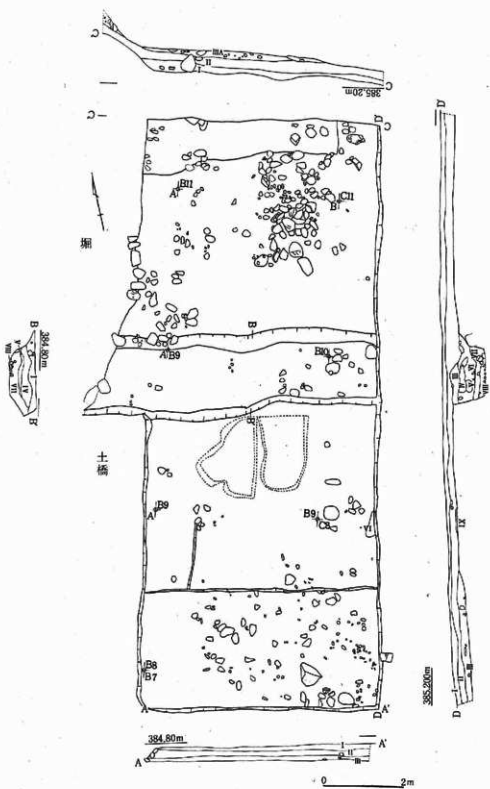
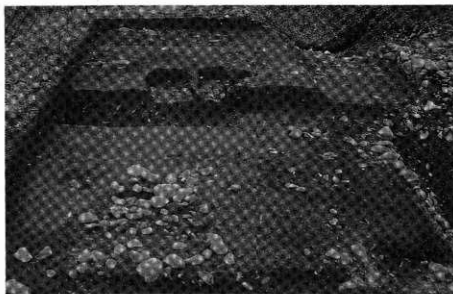
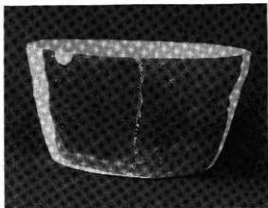


図22 東入り口外の調査全体図

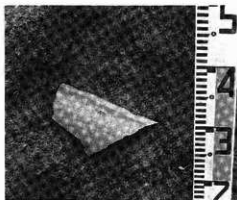
46 → 同溝
の全景(1)
底には鉄
分が沈着
していた。



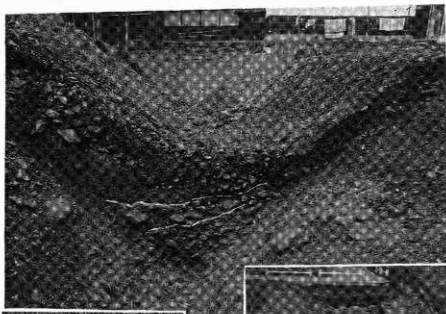
47 ← 同(2)



48↑ 同出土の内耳土器



49↑ 同溝出土の常滑変破片



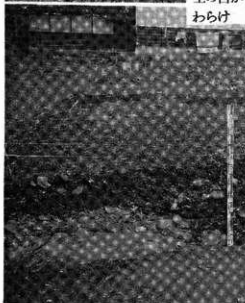
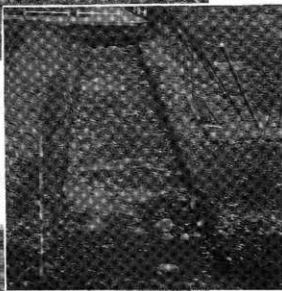
50 ← 東面
掘断面

鉄分の沈着
(白線の間)
底はU字状
になっていた。



51 →
王日神社
の西トレ
ンチ

52 ←
同中央出
土の白か
わらけ



53 ← 東面
堀の東側
道路用地
断面 (写
真50の右
側)

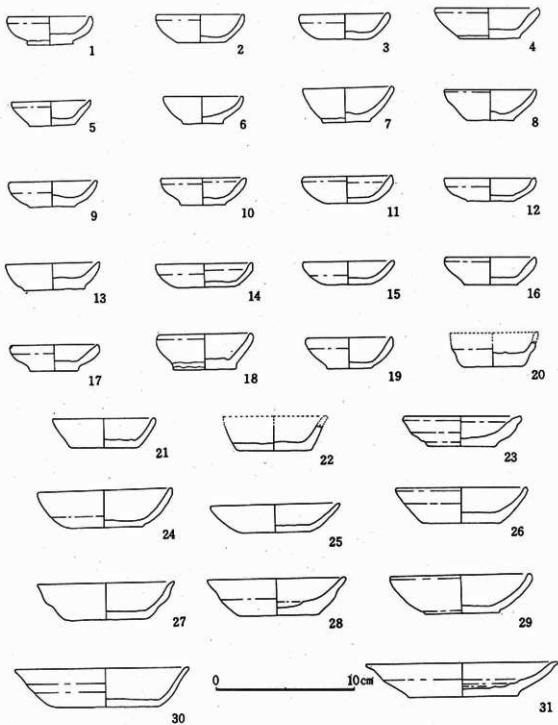


图23 中世土器実測図 (1)

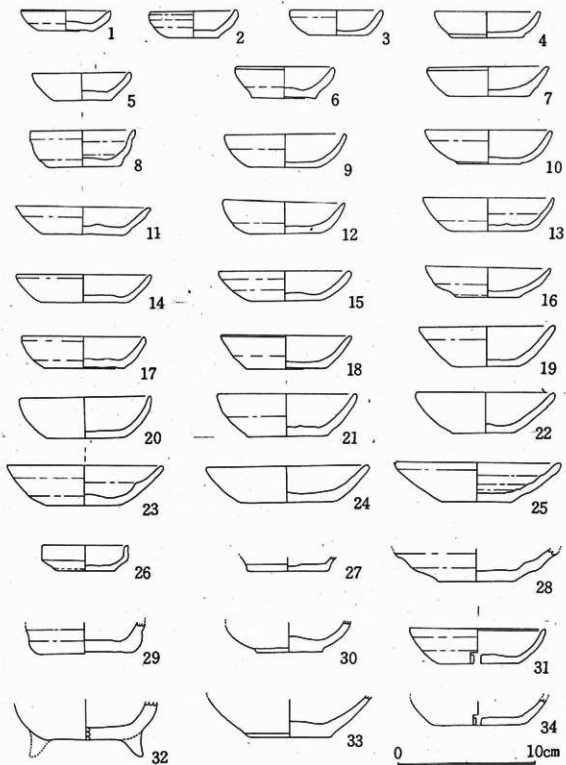
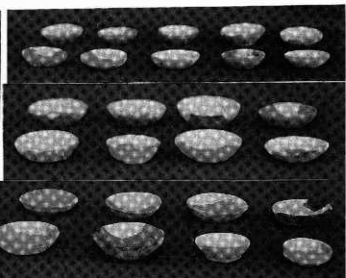


图24 中世土師器实测图 (2)



54↑ DE14出土の中
世土師器
(埋没した石積みの上
層から出土)



55 → 館内出土の中世
土師器



56↑ 鉄鏃 (上段の左端)・鉄釘
(上段)・鉄釘の塊 (下段)



57 ← 測量風景

表 2 館内出土の土器・陶磁器

図版番号	出土地点	種別	器種	備考	図版番号	出土地点	種別	器種	備考
図23-1	BK2	中世土師器	灯明皿・杯		24-11	BM7	中世土師器	灯明皿・杯	
2	BK2トレ	"	"		12	東入口外	"	"	
3	B9B10	"	"		13	BK6	"	"	
4	D石積み	"	"		14	B水路	"	"	
5	DE10	"	"		15	BQ8	"	"	
6	DC5	"	"		16	BQ8	"	"	
7	D木蓋め石列	"	"		17	AG11	"	"	
8	DE15	"	"		18	BN7	"	"	
9	BK2	"	"		19	DG15	"	"	
10	BK2	"	"		20	DL3	"	"	
11	B9B11	"	"		21	E8	"	"	
12	BK2-5	"	"		22	集石	"	"	
13	DF16③	"	"		23	B7	"	"	
14	BK2	"	"		24	B10	"	"	
15	BK12	"	"		25	AE9	"	"	
16	DL3	"	"		26	不明	"	"	うつしもの
17	A38	"	"		27	東入口外	"	"	
18	集石	"	"		28	"	"	"	
19	AB	"	"		29	DG19④	"	"	
20	DD14	"	"		30	東入口	"	"	
21	DK15	"	"		31	A F 10	"	不明	
22	C16	"	"		32	BL3	"	火舎	
23	B9	"	"		33	東入口外・溝	"	不明	
24	BK2	"	"		34	不明	"	不明	
25	BL10	"	"		図26-1	BT3	青磁	鉢	
26	B9	"	"		2	BK9	"	鉢	
27	BN7	"(白土器)	"		3	BK9	"	鉢	
28	BK20	"	"		4	B9	"	鉢	
29	AH11	"	"		5	A F 6	"	鉢	
30	AH3調砂止	"	杯	糸切なし	6	B	"	鉢	
31	東面外	"(白土器)	"	王日神社西	7	東入口外北側	"	鉢	北宋
図24-1	不明	中世土師器	灯明皿・杯		8	AC7	"	鉢	
2	C9	"	"		9	AC8	"	鉢	
3	BK2-5	"	"		10	B J 3	"	鉢	
4	BQ8	"	"		11	B I 6	"	鉢	
5	ト2EW	"	"		12	BQ3	"	染付	
6	DE15	"	"		13	BW	"	鉄輪	
7	BT3	"	"		14	B J 11	"	染付	
8	D石積み	"	"		15	B J 3	"	石製品	
9	BK6	"	"		16	BQ3	"	鉄輪	
10	BK6	"	"		17	B J 3	"	鉄輪	

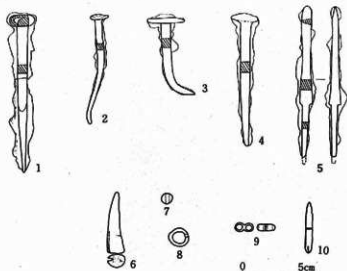


図25 鉄鐵・鉄釘などの実測図

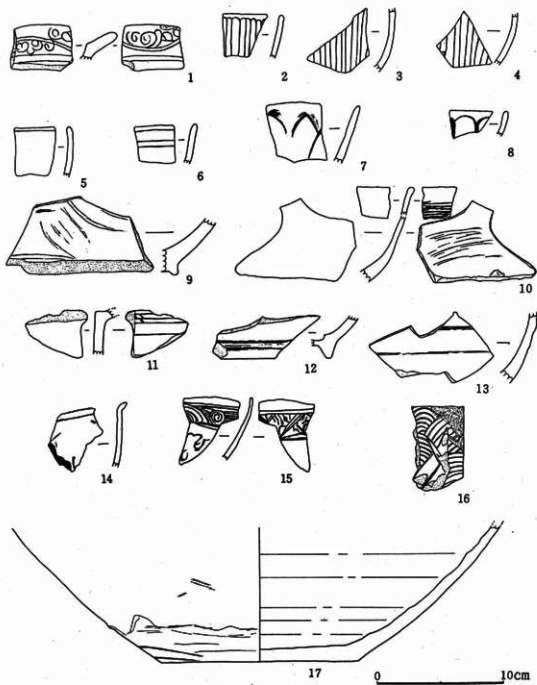


图26 陶磁器实测图

表 3 館内出土の古銭

番号	銭名	字体	初铸年	出土地点	備考	番号	銭名	字体	初铸年	出土地点	備考
1	開元通宝	真	621	B J7	床面	19	寛永通宝	真	1636	AD8	1625年以降
2	"	"	"	B J12		20	"	"	"	AC8	
3	"	"	"	B10	東入口外溝	21	"	"	"	AE7	
4	"	"	"	B J7	溝西の床面	22	"	"	"	AF4	
5	皇宋元宝	"	1039	"	3と合体	23	"	"	"	AD8	
6	嘉祐通宝	行	1055	B19		24	"	"	"	AD9	
7	熙寧元宝	真	1068	D		25	"	"	"	"	
8	元豊通宝	行	1078	B	南北溝	26	"	"	"	"	
9	元祐通宝	行	1085			27	"	"	"	"	
10	紹聖元宝	行	1094	BL9		28	"	"	"	"	
11	永樂通宝	真	1408	B I11		29	"	"	"	"	
12	"	"	"	AG11		30	"	"	"	"	寛永通宝は 庭園出土品 のみ提示
13	不 明			BQ5		31	"	"	"	"	
14	"			BL12		32	"	"	"	"	鉄分含む #異紋文
15	"			BM9		33	"	"	"	"	
16	"			BL12		34	"	"	"	AF4	
17	"			AH11	溝	35	"	"	"	AE7	
18	"			"							

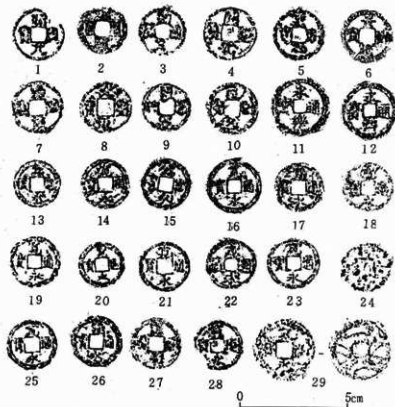
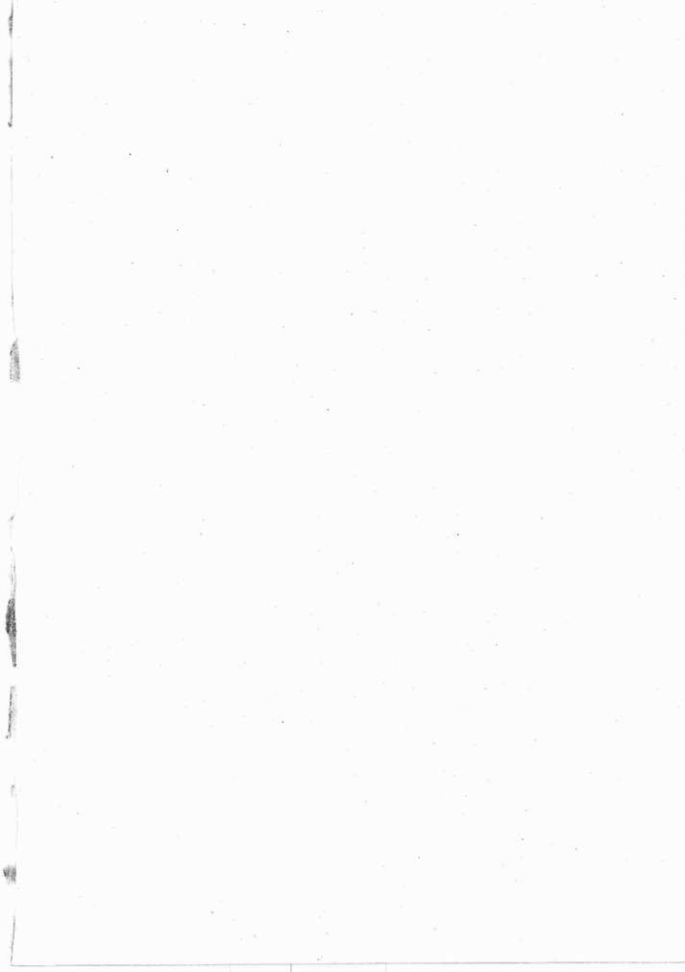


図27 古銭拓影図



高梨館跡発掘調査概報Ⅱ

平成4年3月20日印刷

平成4年3月25日発行

編集 中野市教育委員会
発行 中野市三好町1-3-19

印刷 カナイ美術印刷
